

# 駿府静岡 と私

【第37回】



## 捨てるモノの無い世界

徳川宗家十八代当主・静岡商工会議所最高顧問 徳川恒孝 つねなり



ンタイプがありました。

使っているエネルギーは、太陽と雨水、舟を動かす風、土木工事は人間と牛と馬の力。このエネルギーを使って、江戸八百八町の町ごとに、すし屋とそば屋と天ぷら屋が店を構え、四百軒の寄席があり、人々は、清潔で綺麗な町で、楽しく暮らしていました。一四〇年前まで、完全なリサイクル社会、食料自給率100%の文明社会が日本にありました。

現在の日本の食料自給率は39%と先進国でも最も低く、地球の人口は2050年には96億人になります。この人たちをどうやって食べさせるのでしょうか。現在の食料生産・水利用・エネルギー生産の方法は、未来の世代のニーズを満たす力を損ねています。この問題を解決するには、江戸時代のリサイクルが良いヒントになると思います。



日本橋。『江戸名所図会』天保5年(1834)刊行。挿絵は長谷川雪旦。

江戸時代の物流は、ほとんどが舟で行われていました。利根川の水運は巨大な動脈で、現在の東名高速道路と東北高速道路を合わせたようなものでした。川と船は、人間の毛細血管のように全国に行き渡っていて、米も材木も舟で大きな川に運ばれて、河口で大きな船に積み替えられました。馬の背中には両側に一俵一俵と二俵しか積めませんが、舟なら何十俵、何百俵と積めて船頭さんが前後二人で運べます。物を運ぶには舟が一番でした。

日本橋の魚河岸には、天秤棒を肩にして前後に桶を吊るした人がいて、これが江戸商いの最先端でした。野菜、魚、豆腐、納豆など物を買う人が七割。物を買う人が三割。

買う人は三六五日、町を歩いて何から何まで買っていました。布の

きれはし、木切れ、すり減った下駄、壊れた唐傘、髪結いの床に落ちている髪、かまどの灰、ロウソクが燃え尽きると皿の上に残るロウも買いにきました。壊れた皿や、穴の空いた鉄鍋は、直してもらいます。糞尿は、溜めて桶で運ばれ、有機肥料として畑で使い、野菜になつて、それを食べるという循環でした。子供の着物は継ぎはぎだらけでかまいません。

最後に残った生ゴミは、ゴミ収集業者が取りにきました。それぞれ業者の受け持つ町が決められていて、江戸の生ゴミは永代島に捨てることになっていました。これを四十年続けると、その土地は収集業者の所有物となり、町並みに繰り入れられる時に大きな利益を生みました。爺さんが働いて、親父が働いて、息子が働くと、ゴミ収集業者が土地持ちになるといいます。